

湯 納 遺 跡

—第9次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第225集

1990

福岡市教育委員会

序

早良平野を貢流する室見川の河口域は、肥沃な沖積地が広がり、自然の恵み豊かなところでした。しかし、国道202号バイパス開通以後は開発の波にさらされ、その様相を一変させています。

湯納遺跡は、この室見川左岸の沖積地に面した丘陵端部に立地し1971（昭和46）年のバイパス建設に先立って発掘調査された第1次調査以降、今回が第9次目の調査になります。調査の結果、弥生時代から古代にかけての集落址の一部が検出され、地域史を解き明かす上で貴重な資料になるものです。また、縄文時代の貯蔵穴からはドングリが出土し、縄文人の食文化の一端を垣間見ることができます。

本書に収録された資料が、市民の皆さんに広く活用されますと共に、学術研究の分野においても役立つことを願うものであります。

また、発掘調査や資料整理に当たっては多くの方々のご指導・ご協力をいただきました。殊に開発にあたられた新栄住宅株式会社の担当者諸氏には格別のご理解とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表します。

平成2年3月1日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

——れいげん——

1. 本書は、福岡市教育委員会が1987年5月18日から6月17日に、新条件宅株式会社の貯蔵施設に先立って緊急発掘調査した湯納遺跡第9次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位であり、真北からの偏差は西偏6°21'である。
3. 遺構は時移を記号化して、振り付け物をSB、溝をSD、井戸址SE、土壙をSK、ピットをSPとし、遺構番号は此号のあとにつづけた。
4. 本書に掲載した遺構実測図は小林・山村信栄が作成し、製図は小林・田崎真理が行なった。
5. 遺物の整理実測・製図は小林が行なったが、打製石器は杉山萬雄氏にお願いした。
6. 本書に掲載した写真は遺構・遺物とともに小林が撮影した。
7. 湯納遺跡第9次調査にかかる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。
8. 本書の執筆・編集は小林が行なったが、旨の付翰は岩本陽児が執筆した。

遺跡調査番号：8709	遺跡略号：YUN-9	分布地図番号：101-A-4
調査地地名：福岡市西区大字拾六町字ノサノツ258-4		
剪發面積：1,350 m ²	調査対象面積：775 m ²	調査実際面積：725 m ²
調査期間：1987年5月18日～6月17日		

本文目次

序

I.はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	1
II.立地と歴史的環境	3
1. 立地と歴史的環境	3
2. これまでの調査	4
III.調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 調査の記録	8
1).上塙	8
2).溝	17
3).掘立柱建物跡	21
4).井戸	24
5).包含層の遺物	25
IV.おわりに	28
付『SK-18出土のドングリについて』岩本陽児	29

挿図目次

1. 周辺地形分布図(1/2500)	2
2. 第9次調査区周辺現況図(1/5000)	3
3. 湯納遺跡調査区一覧表	5
4. 第9次調査区構造配置図(1/200)	7
5. 調査区全景	7
6. SK-02・03・05実測図(1/30)	8
7. SK-02全景	8
8. SK-03全景	8
9. SK-05全景	8
10. SK-04・06・07・08実測図(1/30)	9
11. SK-04・06全景	9
12. SK-07全景	9
13. SK-09・10・11実測図(1/30)	10
14. SK-09全景	10
15. SK-10全景	10
16. SK-11全景	10
17. SK-12・13実測図(1/30)	11
18. SK-12全景	11
19. SK-13全景	11
20. SK-14・15実測図(1/30)	11
21. SK-14・15全景	11
22. SK-16・19実測図(1/30)	12
23. SK-16全景	12
24. SK-19全景	12
25. SK-17・18実測図(1/40)	13
26. SK-17・18全景	13
27. SK-18ドングリ出土状況	13
28. SK出土土器実測図(1/4)	14
29. SK出土土器(1/4)	15
30. SK山上石器・土製品実測図(1/2・1/3)	16
31. SK出土石器・土製品(1/3)	16
32. SD-01全景	17
33. SD-01出土:上部実測図(1)(1/4)	18
34. SD-01出土土器実測図(2)(1/4)	19
35. SD-01出土:土器(1/4)	19
36. SD-01出土石器実測図(1/2・1/3)	20
37. SD-01出土石器(1/3)	20
38. 掘立柱建物群	21
39. SB-01~07実測図(1/100)	22
40. SB-01全景	23
41. SB-04全景	23
42. SB-05全景	23
43. 掘立柱建物跡一覧表	24
44. SE-01実測図(1/40)	24
45. SE-01全景	24
46. 包含層出土土器実測図(1/4)	26
47. 包含層出土石器・土製品実測図(1/2・1/3)	27
48. 包含層出土遺物(1/4)	27
49. SK-18出土ドングリ	30

I. はじめに

1. 調査にいたるまで

湯納遺跡は早良平野西辺の低丘陵地帯にあり、国道202号バイパス建設に先立って調査周知され、古墳時代の高床倉庫等の建築部材が発見された著名な遺跡である。後背には叶岳から長垂山へとつづく小山塊がひかえ、眼下には室見川河口の沖積地が広がる田園地帯であった。

しかし、福岡市の都市機能の拡充とともに近郊の市街化が進み、周辺地域は次々と住宅化していった。殊に国道202号バイパスの開通以降は沿線の商工業地化がすすみ、年々その姿を変えつつある。

こうした中、バイパスに面した当該地に倉庫付事務所を建設する開発計画が新栄住宅株式会社から提出された。当該地は、湯納遺跡の東南隅の低丘陵が沖積地へとむかう台地の落ちぎわにあたり、福岡県文化課が発掘調査した第8次調査区の南側に隣接している。このため台地縁辺を巡る集落構造や谷部に堆積した木器等の存在が予想されたため、有無確認の事前調査を実施した。その結果、用地内には低丘陵の端部と東に開口する谷の一部があり、低丘陵上には古墳時代から古代の土壙や柱穴が確認された。これをもとに埋蔵文化財課は新栄住宅株式会社との間に数度の協議を重ねたが、設計変更および遺跡の現状保存は難しく、発掘調査による記録保存の止むなきに至った。

発掘調査は、谷の部分がバイパスの路肩下になり、かつ狭長なため調査が困難であると判断し、台地部分についてのみ実施した。また、調査終盤は梅雨初期の降雨による調査区壁面の崩落や冠水に悩まされながらも、6月17日に無事終了した。

2. 発掘調査の組織

調査委託 新栄住宅株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第2係

庶務担当 第2係長 飛高憲雄(前任)・柳沢一男(現任)・岸田隆(前任)・松延好文(現任)

調査担当 小林義彦・杉山富雄・下村智(試掘調査)

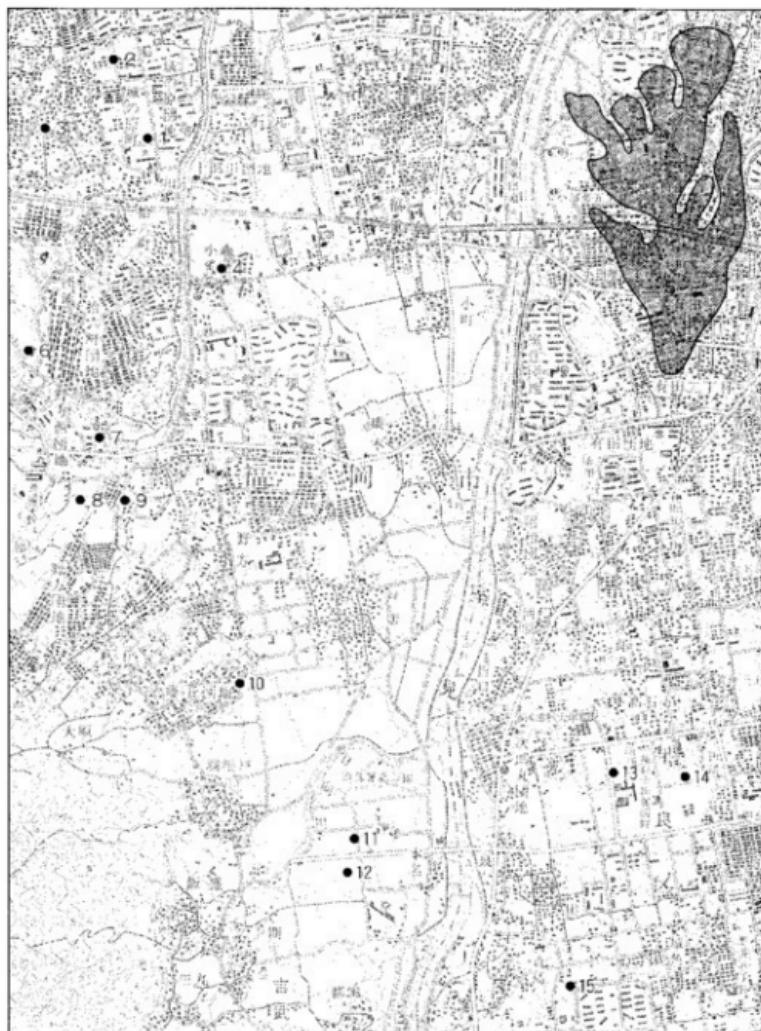
調査補助員 山村信榮(現太宰府市教育委員会)・田崎真理・岩本陽児(九州大学)

調査・整理作業 赤池春光・有田吉太・鬼塚義輝・青柳聖子・荒牧ヤチ代・大瀬良清子・

木村良子・小林フミ子・坂田美佐子・柴田タツ子・清水文代・杉村文子

・土斐崎孝子・中牟田サカエ・西納テル子・西納トシエ・能美八重子・

橋本恵美子・原 和子・西原富代・山下サノエ



見 例	4. 半多田遺跡	8. 野方塙原遺跡	12. 吉武高木遺跡
1. 湯納遺跡	5. 有田・小田部遺跡群	9. 野方鍬塙原遺跡	13. 田村遺跡
2. 桥六町ツイジ遺跡	6. 広石遺跡	10. 羽根戸遺跡	14. 高朝遺跡
3. 宮の前遺跡	7. 野方中原遺跡	11. 須波古墳	15. 四箇遺跡

1. 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

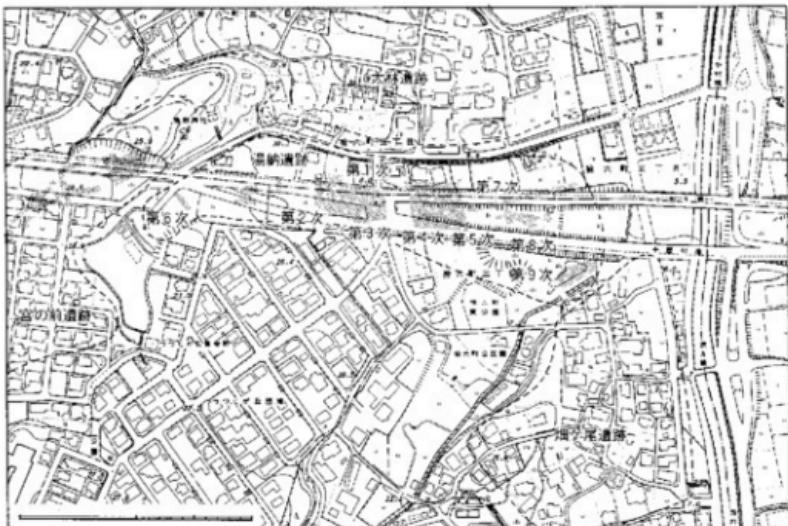
II. 立地と歴史的環境

1. 立地と歴史的環境

湯納遺跡は、室見川左岸の西区大字拾六町コノリ 528 番の 4 外にあり、福岡市文化財分布地図「西部 1、91.104」で周知化されている。

早良平野西辺には糸島平野との境を画す飯盛山・叶岳・長垂山の小山塊がつづき、この山塊からは沖積地にむかって幾筋もの舌状丘陵が派生している。湯納遺跡は、舌状丘陵に三方を囲まれた東に開口する谷を中心とする遺跡で、丘陵上には弥生時代から古代の集落造構が立地する。

湯納遺跡のある室見川左岸域は、この丘陵部を中心に遺跡が展開し、漸次沖積地へと拡がる。旧石器～縄文時代の遺跡は散漫で、羽根戸遺跡や吉武遺跡群等がある。弥生時代になると遺跡数は急増し、平野一円に広く展開する。南方には早良王墓として著名な吉武遺跡群や野方久保遺跡、国史跡の野方中原遺跡があり、西方には終末期の墳墓として著名な宮の前遺跡がある。古墳時代には沖積地に水田が営まれ、その生産力を背景として後背の山麓地帯には広石古墳群や高崎古墳群等をはじめとする大小の群集墳が造営される。奈良時代以降は北方に城ノ原廬寺があり、下山門遺跡や野方塚原遺跡等では製鉄跡が確認されている。また、拾六町周辺は「和名抄」に記載されている「額田郷」に比定されている地域である。



2. 第9次調査区周辺現況図 (1/5,000)

2. これまでの調査

湯納遺跡の調査は、福岡県文化課が国道202号バイパスの建設に際して実施した、1968(昭和43)年の遺跡分布調査に始まる。発掘調査は、翌1969(昭和44)年11月の予備調査(第Ⅲ区)を皮切りに、1971(昭和46)年11月～1973(昭和48)年5月までの間に8次に亘る本調査が実施され、その成果は「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集・第4集」に詳述されている。しかし、調査次数と地区割りとの関係が必ずしも明確でないために多少の混乱が生じているために調査成果を簡単に整理した(表3)。専用、15kg間隔発掘調査ではなく、今回福岡市埋蔵文化財課が倉庫付事務所の建設に伴って実施した発掘調査が湯納遺跡の第9次調査にあたる。なお、今後予想される発掘調査件数の増加については順次調査次数を与えていくものとする。

予備調査 (1969年11月～12月) 第Ⅲ区—K, N

第2次調査区と第6次調査区の中間に位置し、谷の上流域にある。弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡5棟を検出している。第1号住居跡からはジョッキ形土器の外、青銅製鋤先2点、鉄製手鎌1点が出土している。

第1次調査 (1971年11月～72年3月) 第Ⅱ区—A, F

第2次調査区の東隣に位置し、狭隘な谷の中流域にある。弥生時代と平安時代の遺構を検出した。弥生時代の遺構は中期以前とされる隅丸長方形の竪穴住居跡3棟と掘立柱建物跡6棟の外、中期から後期の溝がある。平安時代(10C)の遺構は掘立柱建物跡と柵列、井戸1基がある。溝中からは竹籠が出土している。

第2次調査 (1972年5月～7月) 第Ⅱ区—H, I

第1次調査区の東隣に位置し、狭隘な谷の中流域にある。弥生時代から平安時代の掘立柱建物跡、土壙、溝等を検出している。このうち平安時代の土器留め状の土壙からは「磐固」鉢のはいった瓦や縁釉陶器片が出土している。

第3次調査 (1972年6月～8月) 第Ⅱ区—C, D

第1次調査区の東南に隣接し、谷の中流域にある。弥生時代から平安時代の掘立柱建物跡、土壙、溝、柵列等を検出している。柵列は第1次調査区の物につながる。

第4次調査 (1972年8月～12月) 第Ⅰ区—X, Y, Z

第3次調査区と第5次調査区の中間に位置し、谷の下流域にある。縄文時代から弥生・奈良時代の土壙と溝を検出している。溝1条と土壙1基は縄文時代のもので、土壙からはドングリが出土しており、貯蔵として使用していたものであろう。弥生時代の溝からは木製紡錘車のほか鍬・鋤等の木器が出土している。

第5次調査 (1972年9月～73年3月) 第Ⅰ区—S, T, U, V, W

第4次調査区の東隣に位置し、谷の下流域にある。弥生時代から平安時代の土壙と溝のかか水田址を検出している。水田址からは畦畔を画する杭列が検出されている。鍬・槽等の木器

が出土している。

第6次調査（1972年）第Ⅲ区—U

予備調査区の西に位置し、狭隘な谷の最上流域にある。弥生時代後期から古墳時代前期の溝を検出している。溝からは多量の弥生式土器や土師器のほか石錘も出土している。

第7次調査（1972年11月～73年4月）第Ⅰ区

第5次調査区の東、第8次調査区の北に位置し、狭隘な谷の開口部にある。平安時代の溝を検出したほか、水田址に伴う杭列を検出した。遺物は土師器のほか投弾状土製品や木製鐵等が出土している。

第8次調査（1973年4月～5月）第Ⅰ区

第5次調査区の東、第7次調査区の南に位置し、狭隘な谷の開口部にある。古墳時代の井堰を検出している。井堰の中からは弥生式土器や土師器に混じって臼や槽等の農具や容器のほか多數の建築部材が検出されている。

第9次調査（1987年5月～6月）

第8次調査区の南に位置し、谷開口部の南端にある。縄文時代のドングリ貯蔵穴のほか弥生時代の土壙・溝と古代の掘立柱建物跡を検出した。溝からは弥生前～中期の土器のほか石錘や磨製石錐が出土している。

調査次数	調査期間	時 代	遺 槽	遺 物	備 考
第 1 次	1971年11月 1972年3月	弥生時代 平安時代	井戸・溝・豊穴住居跡 掘立柱建物・柵列	弥生式土器、土師器、須恵器 竹籠	縄文式土器片少量出土。
第 2 次	1972年5月 1972年7月	弥生時代 平安時代	上塙・溝 掘立柱建物	弥生式土器、瓦、黒色土器 土師器、縄棺片	
第 3 次	1972年6月 1972年8月	弥生時代	土塙・溝 掘立柱建物	弥生式土器	
第 4 次	1972年8月 1972年12月	縄文時代 奈良時代	溝・土壤	弥生式土器、土師器、須恵器 木製柄鉈、木製鐵、小製鐵 夜日式土器	縄文時代の溝1条あり。 縄文式土器片出土。 ドングリのピット1基検出。
第 5 次	1972年9月 1973年3月	弥生時代 平安時代	溝・土壤・水田址	弥生式土器、土師器、丸太杭 木製鐵、柵	
第 6 次	1972年	弥生後期	溝	弥生式土器、土師器、石錘	溝の上層で奈良時代の遺物の出土あり。
第 7 次	1972年11月 1973年4月	平安時代	溝・水田杭列	土師器、木製鐵、投弾	
第 8 次	1973年4月 1973年5月	古墳時代	井堰	弥生式土器、土師器、建築部材 臼、槽	
第 9 次	1987年5月 1987年6月	縄文時代 古 代	上塙・溝 掘立柱建物跡	夜日式土器、弥生式土器 土師器、須恵器 瓦・錐形素面青銅	縄文時代のドングリ貯蔵穴2基

3. 湯納遺跡調査区一覧表

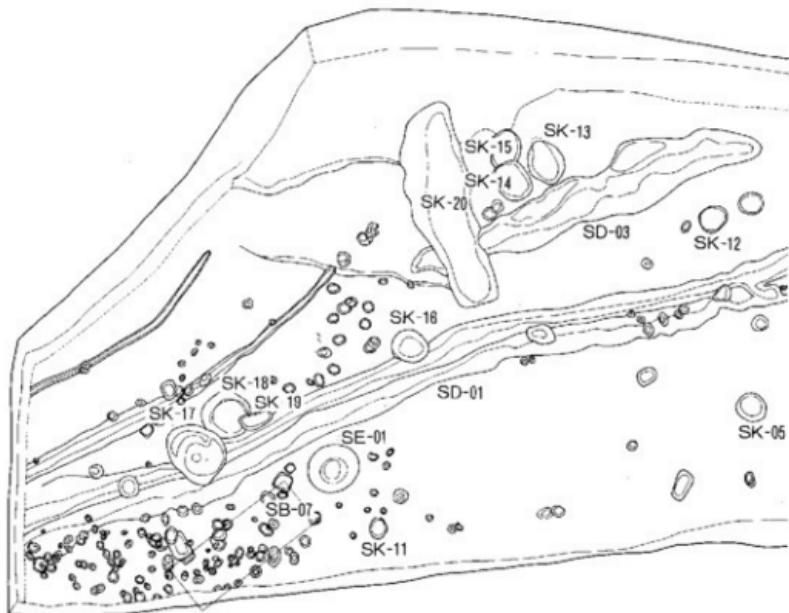
III. 調査の記録

1. 調査の概要

湯納遺跡は、狹隘な谷を廻るようすに拡がる遺跡である。今回調査した第9次調査区は、湯納遺跡の東南隅に位置し、東に開口する谷の開口部南側斜面にあたる。

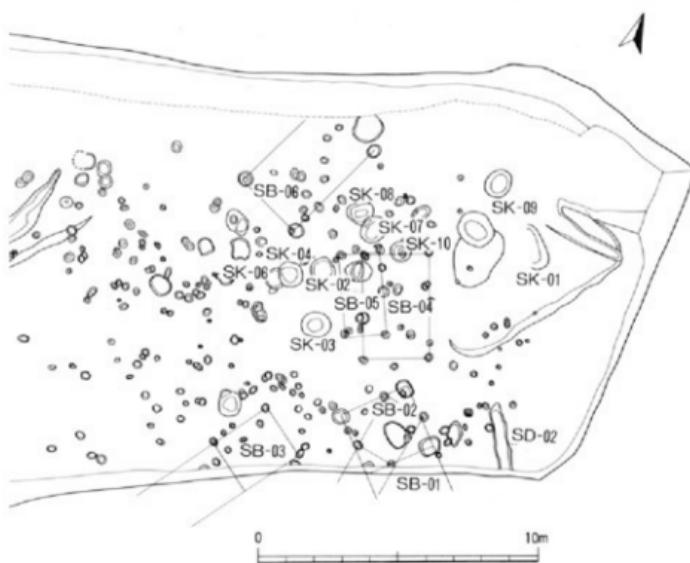
発掘調査は、北側がバイパスの路肩下は水捌けが悪く、湿地状をなしているために調査を断念し、南側緩斜面についてのみ実施した。調査区は北側の谷部へむかって緩く傾斜し、この緩斜面上に遺構が掘り込まれている。標高は南側の最高所で5.3mを測る。

検出した遺構は、縄文時代の土塙、弥生時代の土塙と溝、古代の掘立柱建物跡のほか多数の柱穴を検出した。このうち、弥生時代の溝は調査区中央を谷の向きに沿うようににはしり、土塙や掘立柱建物跡等はこの溝の南側、つまり台地側の緩斜面上に多く分布するが、中央部がやや散漫な分布状況を示す。掘立柱建物跡のうち、本調査区内で完結するものは3棟しかなく、残りはいずれも台地側の調査区外にのびることから、この期の集落はさらに台地上に広く展開するものであろう。



4. 第9次調査区遺構配置図 (1/200)

5. 調査区全景



2. 調査の記録

1) 土壙

土壙は20基を検出し、台地先端にあたる東側に集中する傾向がある。このうち2基がドングリ貯蔵穴で、これが大型の円形の外は弥生時代以降のものは2例を除いてはいずれも小型の円形か橢円形をなす。これは他地区でも同様で、直ちに時代的・地域的傾向を示すとは言い難い。

S K - 01 (4・28~31)

調査区の最東端に位置する大形の土壙。平面形は長辺が6.7mの長方形を呈し、西半は削平により消失している。深さは20cm。北小口側には幅約50cmの浅い溝が小口に沿ってはしる。

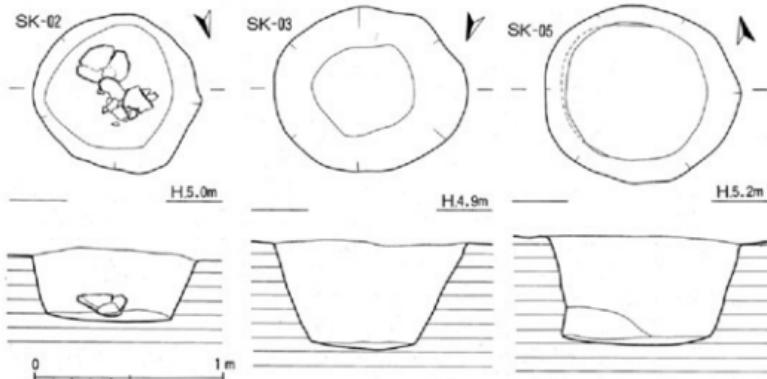
出土遺物 (7・11・20~22・23・26) 7・11は夜白式甕の底部。20~22は土師皿で、22は底面に板目痕が残る。23は黒曜石の打製石器。26は玄武岩の太形船刃石斧で刃部を欠く。

S K - 02 (6・7)

調査区東部にあり、SK-04とSB-05に挟まれて位置する。平面形は直径約85cmの円形を呈し、深さは38cmを測る。断面形は逆台形をなし、底面は平坦である。

S K - 03 (6・8)

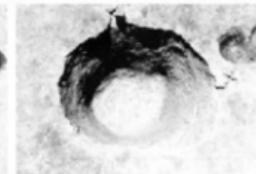
調査区の東部に位置し、SK-02の南1mの距離にある。平面形は長軸104cm、短軸82cmの



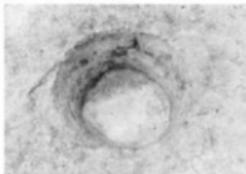
6. SK-02・03・05実測図 (1/30)



7. SK-02全景



8. SK-03全景



9. SK-05全景

楕円形を呈する。壁面は緩傾斜し、断面は逆台形をなす。底面は浅く凹み、深さ57cmを測る。

SK-04 (10・11)

調査区の東部に位置し、西側はSK-06を切っている。平面形は82~88cmの隅丸方形状をなし、深さは27cm。断面形は逆台形で底面は凹レンズ状を呈す。弥生壺・高杯と土師器壺が出土。

SK-05 (6・9・28・29)

調査区の中央部に位置する。平面形は長軸105cm、短軸95cmのほぼ円形を呈する。壁面は急峻に立ち上がり、箱形の断面形を呈する。底面は浅い凹レンズ状をなし、深さは58cmを測る。

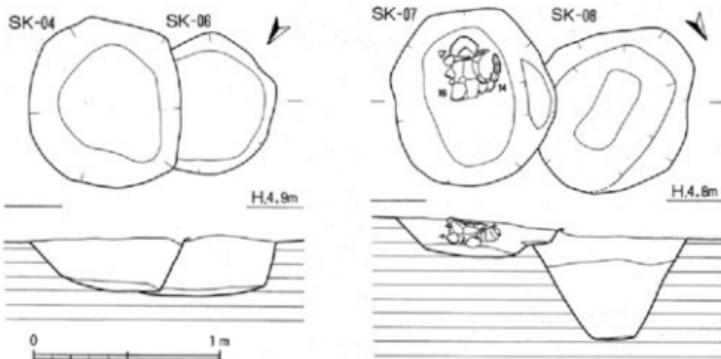
出土遺物 (19) 底径9.0cmの器台脚部である。脚裾は水滴状に肥厚して小さく開く。

SK-06 (10・11)

調査区東部に位置する。東側はSK-04によって切られる。平面形は径75cmの円形で、深さは30cmを測る。断面形は箱形で、底面は浅い凹レンズ状を呈す。弥生土器片が少量出土した。

SK-07 (10・12・28・29)

調査区北東部に位置し、SK-08より新しい。平面形は長軸95cm、85cmのほぼ円形で、西側



10. SK-04・06・07・08実測図 (1/30)



11. SK-04・06全景



12. SK-07全景

に平坦面を作る。壁面は緩く立ち上がり、深さ20cmを測る底面は凹レンズ状に浅く凹む。

出土遺物（3・14・16） 3は夜臼甕で、端部に刻み目を施した凸帯を巡す。14は二重口縁甕。口縁部は短く直口する頸部から小さく外反した後垂直に立ち上がる。調整は外面がハケ目、内面はヘラケズリ。16は鉢。体部は球形をなし、口縁部は内外から摘み上げて直口ぎみになる。

S K - 08 (10)

調査区の北東部に位置し、東隅はS K - 07に切られている。平面形は長軸98cm、85cmのほぼ円形を呈し、深さは55cmを測る。壁面は45×20cmの長方形の底面にむかって握り鉢状に窄まる。

S K - 09 (13・14)

調査区の北東隅に位置し、S K - 01の西に隣接している。平面形は長軸105cm、88cmの楕円形を呈する。深さは55cmの壁面は急峻に立ち上がり、断面形は箱形をなす。底面は平坦である。

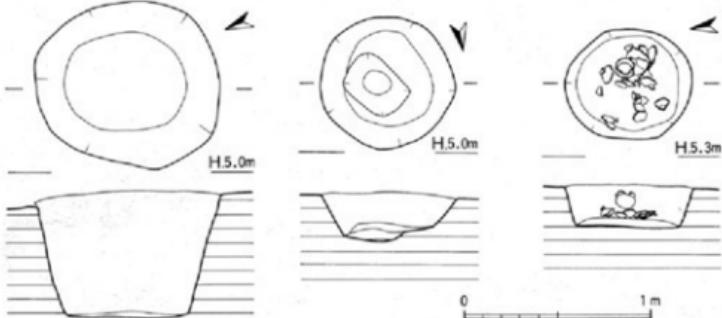
S K - 10 (13・15・28・29)

調査区の東部にあり、S B - 04と重複している。平面形は径72cmの円形を呈し、深さは27cmを測る。壁面は逆台形状に窄まる。底面は平坦であるが、東側には35×25cmの小穴を穿つ。

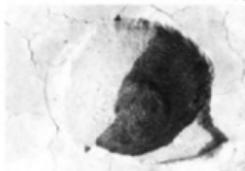
出土遺物（15） 「く」字状口縁の甕で、調整は胴部下半がナデ、内面はヘラケズリ。

S K - 11 (13・16・28~31)

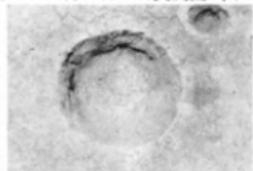
調査区の南西部、S E - 01の南東1.5mの距離にある。平面形は60×68cmの円形を呈し、断面形は箱形をなす。底面は平坦で深さは23cmを測る。底面から小型壺や器台等が出土した。



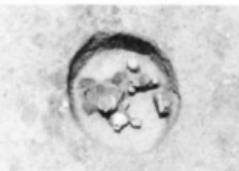
13. SK-09・10・11実測図 (1/30)



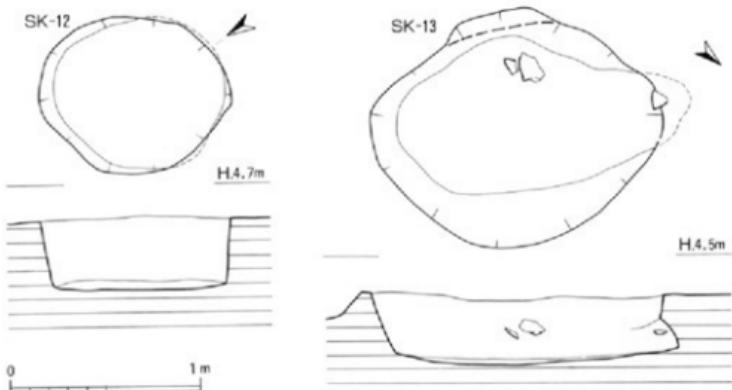
14. SK-09全景



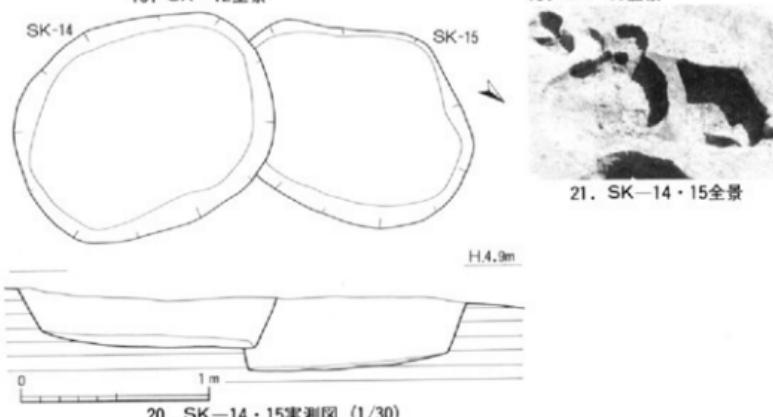
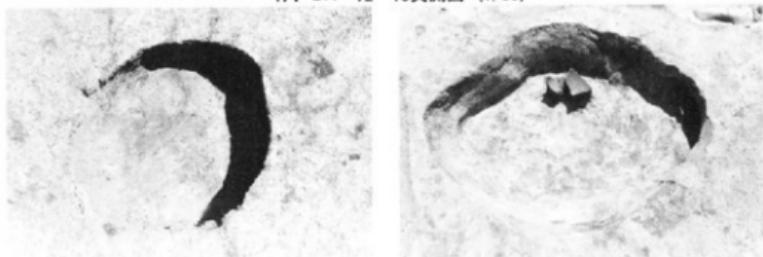
15. SK-10全景



16. SK-11全景



17. SK-12・13実測図 (1/30)



出土遺物 (13・17・18・27) 13は口縁部が内湾ぎみに開く小型丸底壺で、体部は扁球形をなす。17・18は器台。受け部は直線的に外反し、脚部は短く朝顔状に開く。27は太形蛤刃石斧。

S K-12 (17・18・28・29)

調査区の中央部北側、S D-01・03東端の中間に位置する。平面形は長軸100cm、85cmの楕円形を呈する。ほぼ垂直に立ち上がる壁面は断面形が箱形をなし、南側は小さく袋状に窄まる。底面は平坦で深さは40cmを測る。遺物は弥生土器片と夜臼式甕片が出土している。

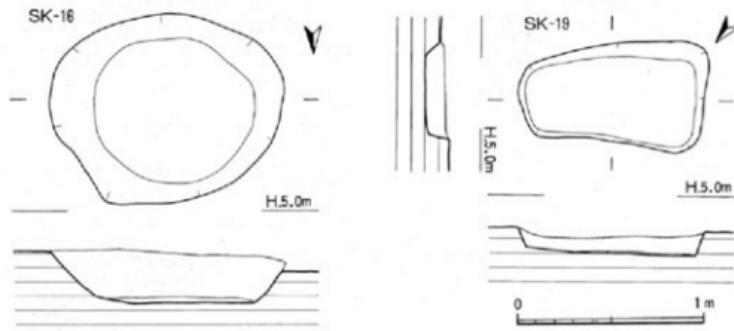
出土遺物 (1・2・5・6・8・12) いずれも夜臼式甕である。1・2は口縁部で、1は端部に刻み目を施し、2は直下に小さな三角凸帯をめぐらす。6・8・12は甕の底部である。

S K-13 (17・19)

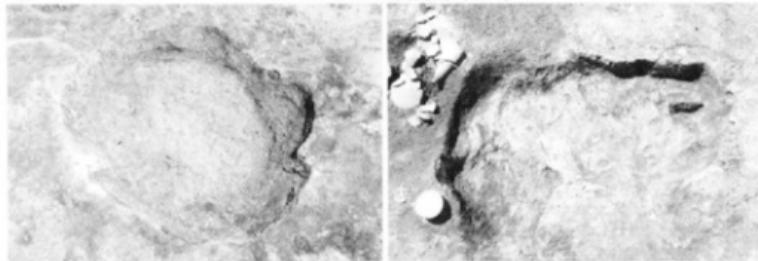
調査区の北西部に、SK-14・15の東に隣接する。平面形は長軸157cm、短軸120cmの菱形に近い楕円形で、深さは35cm。断面形は逆台形で、西壁は袋状に窄まる。底面は凹レンズ状。

S K-14 (20・21)

調査区の北西部にある。北側はSK-15と重複し、新しい。平面形は長軸140cm、短軸115cmの隅丸方形を呈し、断面形は逆台形をなす。深さ30cmを測る底面は浅い凹レンズ状を呈する。



22. SK-16・19実測図 (1/30)



23. SK-16全景

24. SK-19全景

SK-15 (20・21)

調査区の北西部にあり、南側はSK-14に切られる。平面形は長軸127cm、短軸100cmの歪んだ隅丸方形。壁面はやや急で、断面形は逆台形をなす。底面は平坦で、深さは40cmを測る。

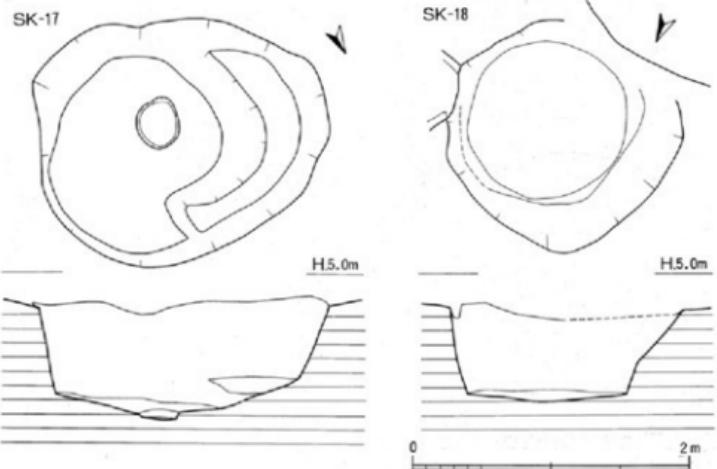
SK-16 (22・23・30・31)

調査区の中央部西寄りに位置し、南側はSD-01と重複する。平面形は長軸120cm、短軸100cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形をなす。底面は平坦で、深さは30cmを測る。

出土遺物 (25) 磨製石斧の基部剝片である。

SK-17 (25・26・28・29)

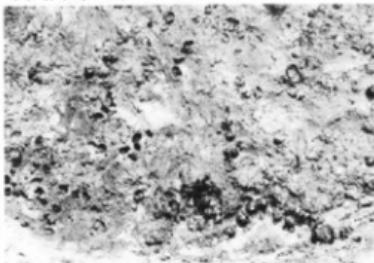
調査区の西端部にあり、SK-18より新しく、SD-01より古い。平面形は長軸206cm、短軸176cmの楕円形で、深さは80cmを測る。壁面は急峻な箱形をなし、西側には幅約20cmの平坦



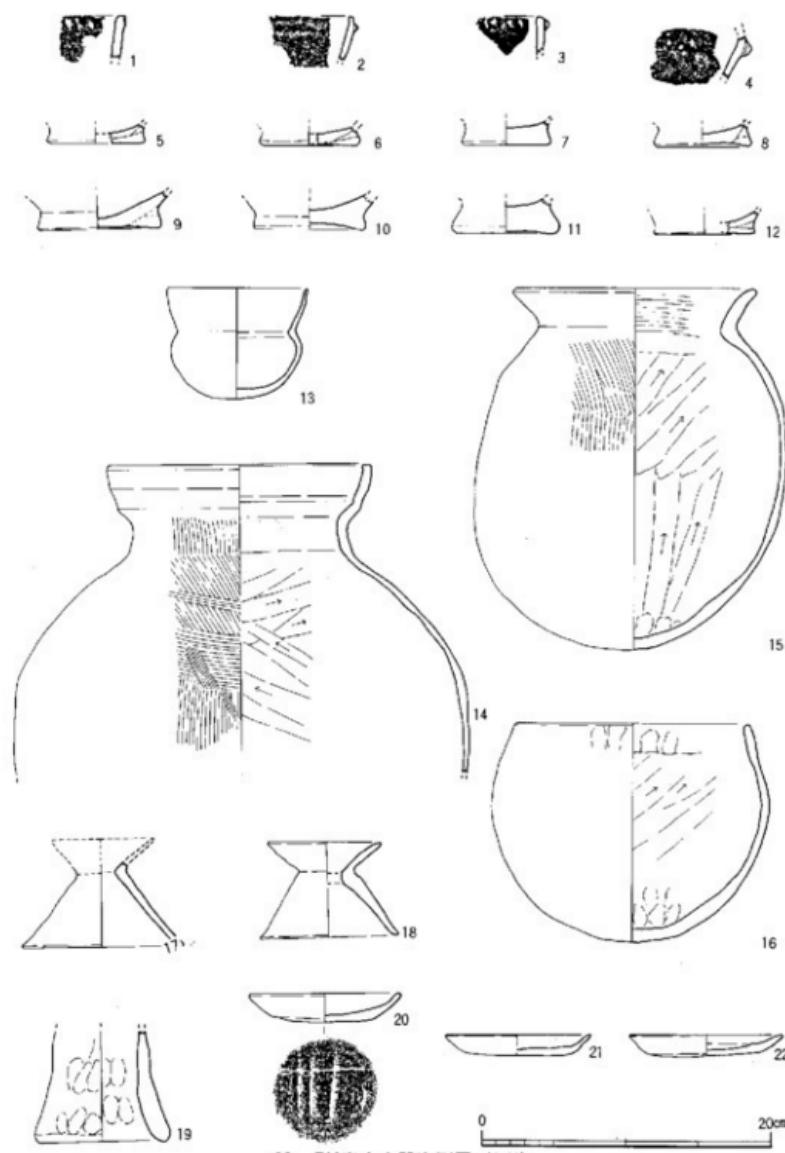
25. SK-17・18実測図 (1/40)



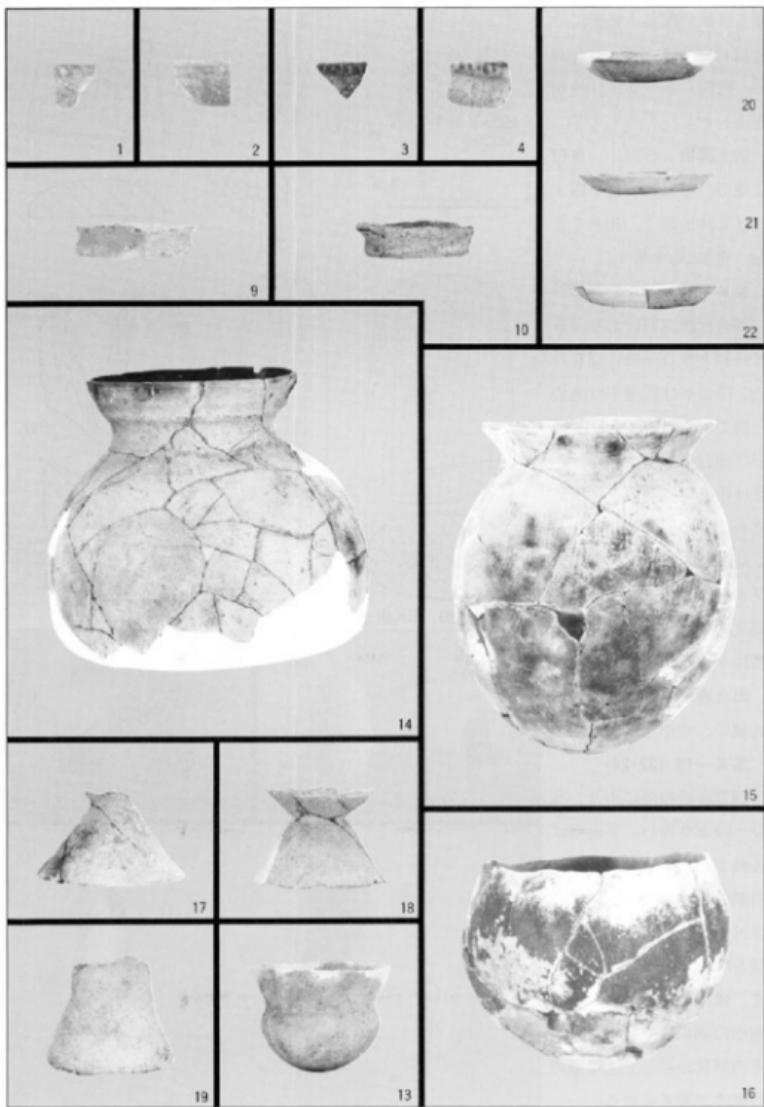
26. SK-17・18全景



27. SK-18 ドングリ出土状況



28. SK出土土器実測図 (1/4)



29. SK出土土器 (1/4)

面を弧状に作る。底面には径約30cmの浅いピットを窄つ。底面からドングリ粒が出土した。

出土遺物 (4-24) 夜白

式壺で凸帯に刻み目を施す。

24は管状土錐で、長さ5.7cm、重さ65gを測る。

S K-18 (25-26-28-29)

調査区西端部にあり、S K-17とS D-01に切られる。平面形は直径170cmの円形で、深さは60cm。断面形は逆台形を呈するが、西壁は中位で屈曲した後緩く立ち上がる。底面は浅い凹レンズ状をなし、一面にドングリが散らばっていた。

縄文晩期末～弥生時代の土器片が少量出土した。

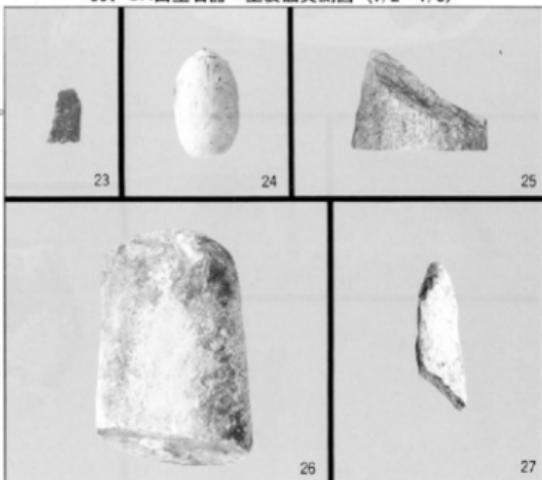
出土遺物 (9-10) 夜白
式壺で、やや上げ底になる。

S K-19 (22-24)

調査区の西部にあり、S D-01より古い。平面形は長軸100cm、短軸40～60cmの隅丸長方形で、主軸方位はN-47°-E。壁面は東側壁を除いて急峻に立ち上がる。床面は平坦であるが、南小口側に緩く傾斜する。その形状からして土壤器の可能性が考えられる。



30. SK出土石器・土製品実測図 (1/2・1/3)



31. SK出土石器・土製品 (1/3)

2) 溝

調査区内において3条（SD-01～03）の溝状遺構を検出した。時期的には弥生時代中期以降に属するものである。このうちSD-01は調査区中央を谷に沿って東西流するもので、台地上の遺構群と谷部とを画する感を与えるが明確な判断はつけがたい。

SD-01 (4・33～37)

調査区のほぼ中央部を谷に沿うように東西流する溝で、東側は谷部へむかって小さく湾曲する。西側ではSK-17～19を切り、中央部ではSK-16に切られる。現長は31mをはかる。溝はじめに覆土が暗茶褐色土の南側が掘られ、その埋没後に1mほど北へずれて同様の溝を開削している。覆土は砂層で、遺物は弥生式土器のほか夜臼式土器や古墳時代～古代の須恵器・土師器と越州窯系青磁碗等が出土している。この2条の溝は、ほぼ重なるように開削されていることから短時日のうちに掘りなおされたものと推定される。

・出土遺物 (28～71) 28～47は夜臼式甕である。28～35は口縁部で、刻み目を施した凸帯が端部につくものとやや下がってつくものとがある。底部は上げ底と平底がある。胎土は粗く、ナデ調整する。48～50は壺。48は底径7.2cmで、焼成後に円孔を穿つ。50は丹塗り壺で直口ぎみの頸部に朝顔状の口縁部がつくものであろう。胴部は肩の張った扁球形で、頸部との境に三角凸帯が1条巡る。内面はナデ調整。51・52は壺で、51は口径27.5cm、器高32.6cm。「く」字状の口縁部は端部が肥厚し、倒卵形の胴部がつく。内外面の一帯に煤が付着している。53・54は鉢。体部は半球形をなし、口縁部は直口ぎみに摘み上げる。55は器台で、受け部と脚部はラップ状に小さく聞く。

56は安山岩製、57・58は黒曜石の打製石鏃。60は変成岩質の柳葉形磨製石鏃で端部を欠く。61は滑石製の有溝石鏃で長さは5.7cm、重さは18g。62は滑石製の有孔円盤で復原径6.3cm。63・64は石包丁の半欠品。65～67は扁平片刃石斧の半欠品。68は太形の磨製石斧。69は敲打石。70は砥石の半欠品。

SD-02 (4)

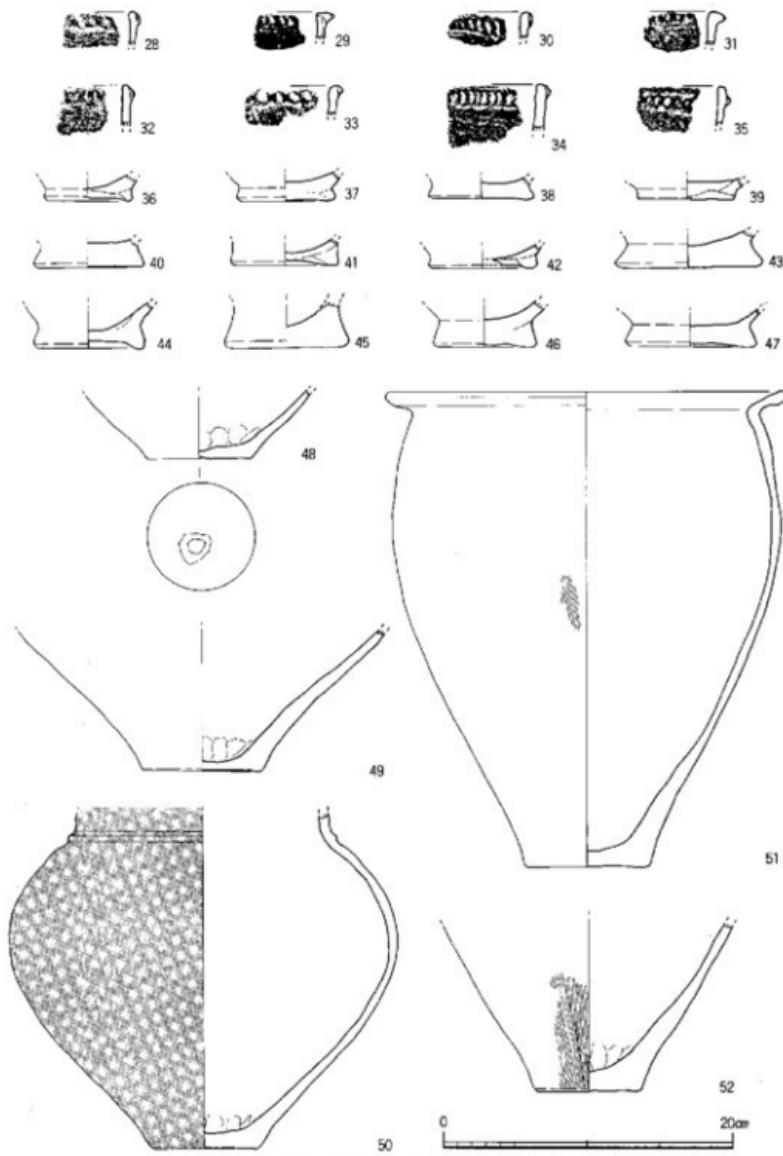
調査区の南東隅に位置し、南北流する溝である。現長2.4mで、断面形は逆台形をなす。遺物は弥生中期の甕小片が少量出土している。

SD-03 (4)

調査区の中央部北側に位置し、SD-01の東側にほぼ平行して東西流する。長さは12.8m、幅は1.5～2.3mを測る。断面形は舟底状をなし、北側で2



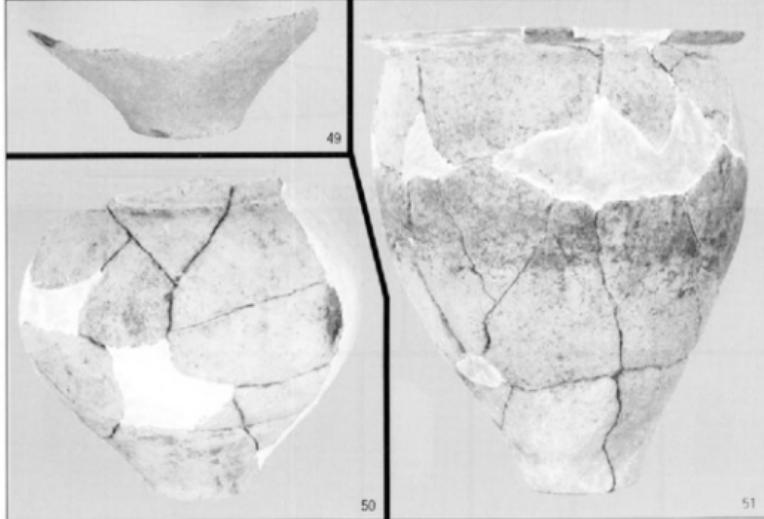
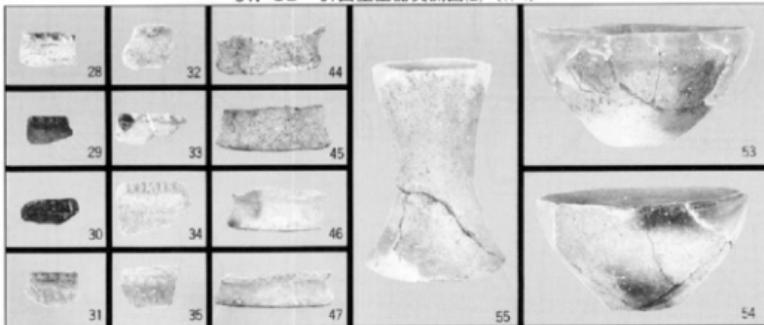
32. SD-01全景



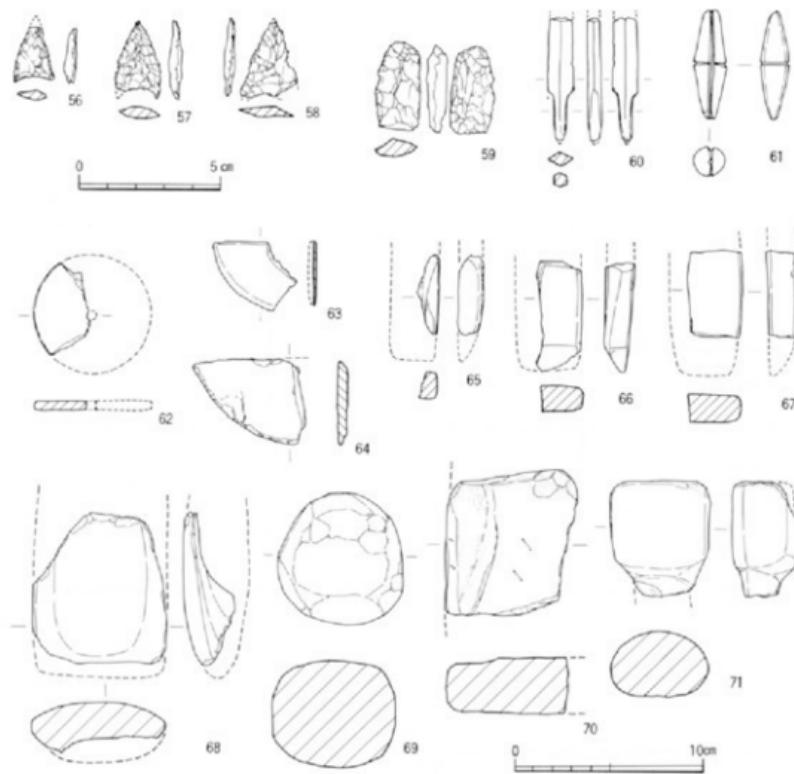
33. SD-01出土土器実測図(1) (1/4)



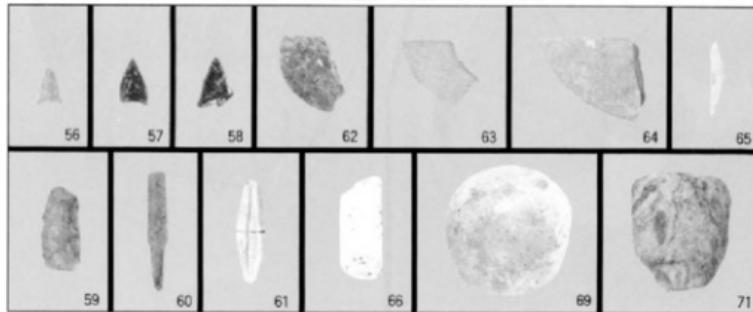
34. SD-01出土土器実測図(2) (1/4)



35. SD-01出土土器 (1/4)



36. SD-01出土石器実測図 (1/2・1/3)



37. SD-01出土石器 (1/3)

ヶ所の平坦面をつくる。

3) 挖立柱建物跡

調査区内において7棟の掘立柱建物跡を検出した。この中で完結したものは3棟(SB-04～06)で、その外は調査区外にのびたため規模は明確でない。完結した建物跡はいずれも2×3間の小規模なものである。建物跡は1棟を除いて東側に分布するが、舌状台地の先端に立地するために全体としての拡がりは把握できない。

SB-01 (38～40)

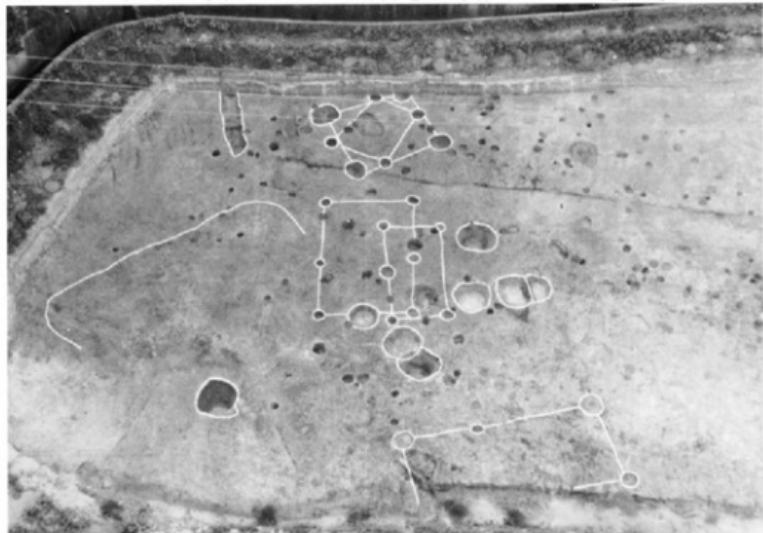
調査区の南東部に位置する建物跡で、SB-02と重複する。現状規模は1×1間であるが、南側調査区外にのびる2×1間以上の東西棟になる可能性がある。柱穴は方形で60～75cmを測り、他の建物跡と比べてやや大型である。深さは15～20cm。

SB-02 (38・39)

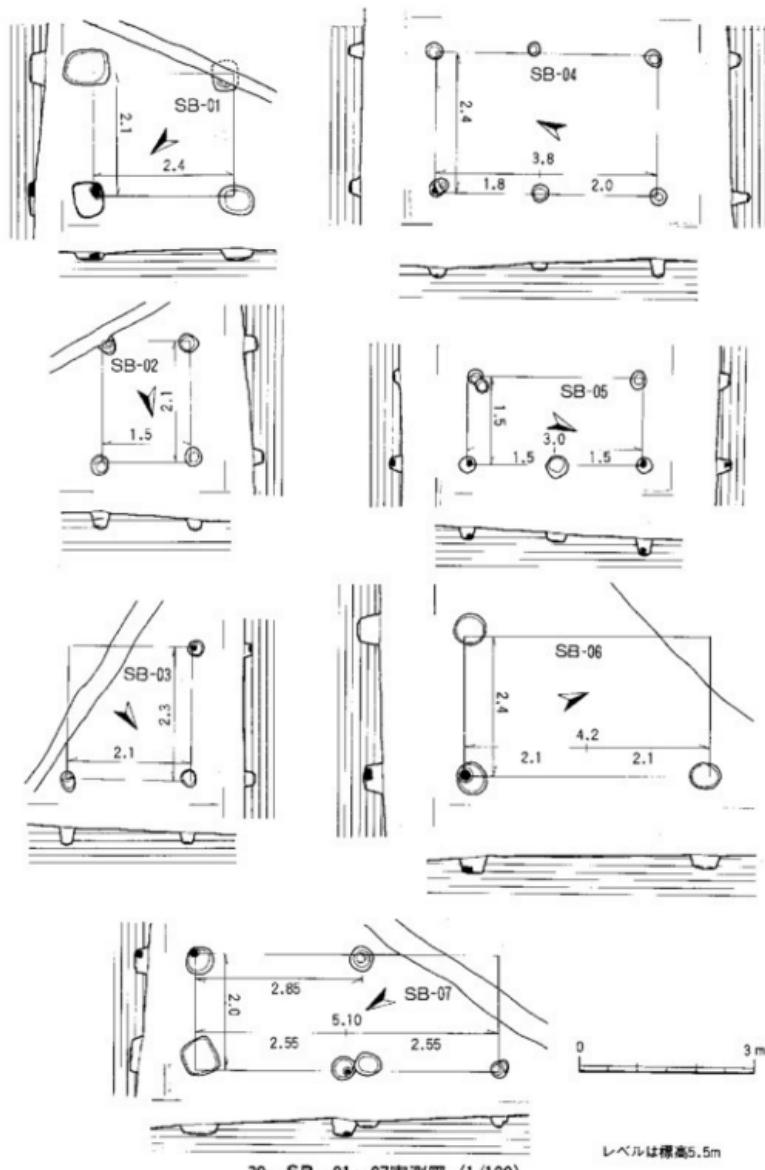
調査区の南東部に位置する建物跡で、SB-01と重複する。現状規模は1×1間であるが、南側調査区外にのびる2×1間以上の東西棟になる可能性がある。柱穴は直径約30cmの円形で、深さは10～20cmを測る。柱穴内から弥生～古代の土器小片が少量出土している。

SB-03 (38・39)

調査区の南東部に位置する建物跡である。現状規模は1×1間であるが、南側調査区外にのびる可能性が考えられる。柱穴は20～30cmの円形を呈し、深さは10～25cmを測る。



38. 挖立柱建物群



39. SB-01~07実測図 (1/100)

レベルは標高5.5m

SB-04 (38・39・41)

調査区の東側に位置する 2×1 間の南北棟で、SB-05と重複する。桁行全長は3.8m、柱間寸法1.8m・2.0m、梁間は2.4mを測る。柱穴は直径20~30cm、深さ10~25cmを測る円形を呈する。

SB-05 (38・39・42)

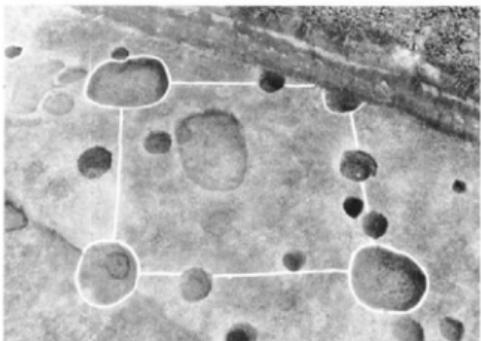
調査区東側にある 2×1 間の南北棟で、SB-04と重複する。桁行全長は3.0m、柱間寸法は1.5mの等間、梁間は1.5m。柱穴は直径30~40cm、深さは約10cmの円形を呈する。全体に削平が著しく西側柱は中央穴が消失している。

SB-06 (38・39)

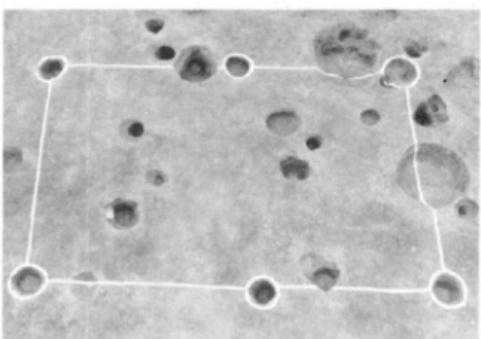
調査区北東側にある南北棟で、現状規模は 1×1 間であるが、桁行長からして 2×1 間になるものであろう。桁行全長は4.2m、柱間寸法は2.1mの等間、梁間は2.4m。柱穴は直径40~50cm、深さ15~25cmの大きめの円形を呈する。

SB-07 (38・39)

調査区の西側に位置する 2×1 間の南北棟。桁行全長は5.1m、柱間寸法は西側柱が2.55mの等間、東側柱は2.25・2.85mと東西で異なる。梁間は2.0mを測る。柱穴は直径40~60cm、深さは約15~45cmの円形を呈するが、北西隅柱は方形になる。柱穴内から弥生中期の甕片が少量出土している。



40. SB-01全景



41. SB-04全景



42. SB-05全景

	規 模 (間)	方 向	柵 行		梁 行		方 位	床面積	備 考
			実 長 (m)	柱間寸法 (尺)	実 長 (m)	柱間寸法 (尺)			
SB-01	1×1+α		2.4	8	2.1	7		5.04	
02	1×1		2.1	7	1.5	5		3.15	
03	1×1+α		2.3	7.6	2.1	7		4.83	
04	2×1		3.8 (1.8 2.0)	6、6.6	2.4	8		9.12	
05	2×1		3.0 (1.5 1.5)	5、5	1.5	5		4.5	
06	1×1		4.2	14	2.4	8		10.08	
07	2×1		5.1 (2.55 2.55)	17、3 (8.65 8.65)	2.0	6.7		10.2	

43. 挖立柱建物跡一覧表

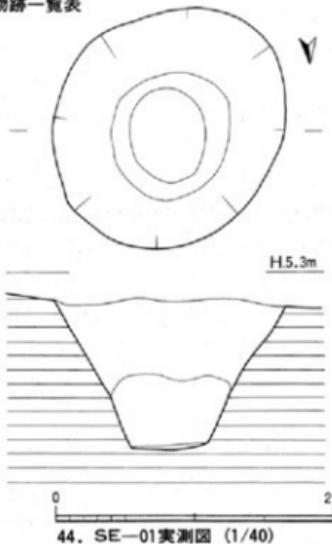
4) 井戸

井戸としては1基を検出した。それが明確な井戸とは即断しがたいが、ほかの土壤とはその規模や形状に明らかに相違があるために一先ず井戸として取り扱った。なお、これまでの調査では井戸は検出されていない。

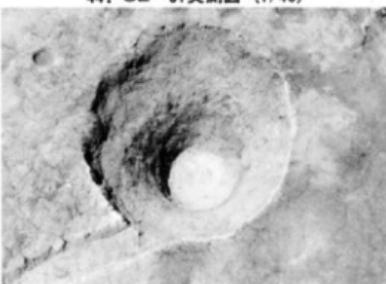
SE-01 (44・45)

調査区の南西部で検出した素掘りのものでSB-07の東に隣接している。平面形は長軸180cm、短軸約157cmの楕円形を呈する。壁面は検出面より約70cmは緩い摺鉢状をなし、小さく屈曲した後急速に窄まる。深さは105cmを測り、55~65cmの楕円形を呈する底面の標高は4.04mである。断面形は逆台形をなし、底面は浅く凹む。覆土は概ね7層に分かれる。上層から暗茶褐色土、灰青褐色粘質土(粗砂粘土ブロック混)、灰青褐色粘質土、濃灰褐色粘質土、淡灰黑色粘質土、濃灰黑色粘質土(粗砂混)、灰青色粘質土が10~20cmの厚さで凹レンズ状に堆積している。

遺物は壺・甕・高杯等の弥生式土器や古墳時代~古代の土師器と須恵器のほか、軒平瓦2点が出土しているが量的には多くない。



44. SE-01実測図 (1/40)



45. SE-01全景

5) 包含層出土の遺物

調査地は旧来水田であり、その耕作土下と遺構検出面との間には暗褐色土の遺物包含層が5~15cmの厚さで堆積しており、北側の谷部ほど厚くなる。この遺物包含層には縄文時代晩期末~中世初めまでの多様な遺物が含まれているが、量的には比較的少ない。地山の浅い凹地からは龍泉窯系青磁碗や白磁が出土しており、当該期の集落遺構が台地上に展開していたことを容易に窺わせる。また、調査区全域から少量ながら鐵滓が出土しており、丘陵上にはこれに関連する何らかの遺構があったものと推定される。本調査区南方の丘陵上のコノリ製鉄遺跡があり、これとの関わりを考えるとき興味深い資料となろう。

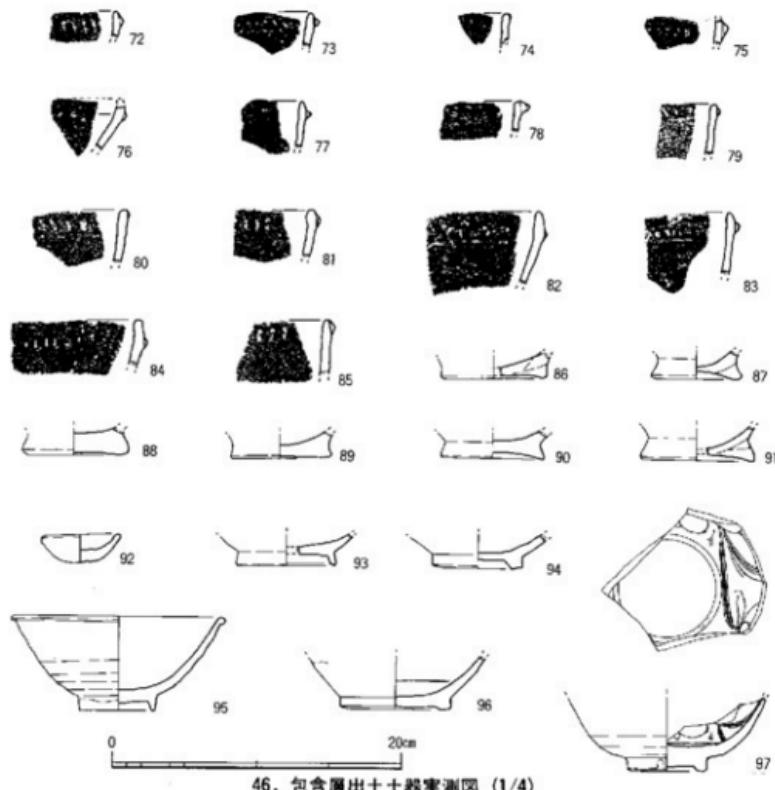
出土遺物 (72~109)

72~75・77~91は夜臼式の變形土器である。72~85は口縁部で、直口ぎみに立ち上がる。いずれも刻み目を施した凸帯を巡らす。凸帯は口縁端に付するもの (72・74・78・80・81・85) とやや下がった位置に付するもの (73・77・79・82~84) がある。内外面ともに摩滅が著しい。82は鉢の可能性がある。86~91は底部で、上げ底ぎみのもの (86・87・90・91) と平底のもの (88・89) がある。いずれも端部は、粘土貼り付けにより三角凸帯様に突き出す。76は鉢である。体部は上位で屈曲し、口縁部は短く直口するものであろう。屈曲部には刻み目を施した凸帯が巡る。調整は押圧後ナデて仕上げるが風化による摩滅が著しい。

92は手捏ねのミニチュア土器である。口径は5.4cm、器高は2.0cmを測る。体部は扁平な半球形を呈し、口縁部は短く開く。内外面とも指頭押圧痕が残る。胎土はやや粗く、砂粒と雲母を含む。焼成は良好で、淡赤褐色~淡灰褐色を呈する。

93~97は陶磁器である。93は国産の綠釉碗である。灰色の緻密な須恵質の胎土で、焼成もよい。内外面にうすい緑色の不透明な釉がかかる。豊富の釉はかき取る。高台うちは糸切り痕が残る。近江系のもので10世紀に比定できる。94~96は白磁碗である。94は灰白色の胎土で内面に若干青味がかった黄白色の不透明な釉がかかる。95は口縁端を折り返し小さな玉縁となすやや小ぶりの碗である。胎土は灰白色で緻密。不透明な灰白色の釉がほぼ高台までかかる。焼成も良好である。96は、幅が広く低い高台をもち、見込に沈圈線を有する。乳白色の素地に、不透明な黄白色の釉がかかる。体外半釉。酸化気味に焼成され、釉も完全に溶け切っていない。97は龍泉窯系青磁碗である。内面に蓮花折枝文を施す。胎土は灰色で、極めて緻密である。半透明な灰オリーブ色の釉がほぼ豊富までかかる。

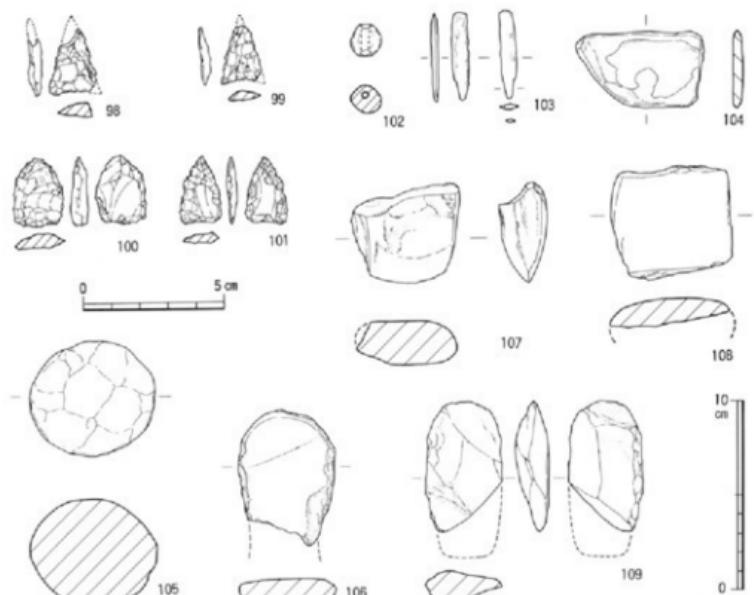
98~101は黒曜石の打製石鎌である。98・99は尖頭部を欠く。100は長さ2.4cm、基部幅1.6cm。101は長さ2.4cm、基部幅1.4cmを測る。102は土製玉で、径1.5cmを測る。焼成前に中心よりややずれた位置に、管状工具で穿孔する。103は現長4.7cmの柳葉形磨製石鎌で、先端部を欠く。風化により鎌は消失しているが、断面形は菱形になろう。茎は1.0cmと短く、楕円形を呈する。104は半欠の石包丁で、現長6.8cm、身幅4.1cm、厚さ6mmを測る。背部は直線的で、刃部



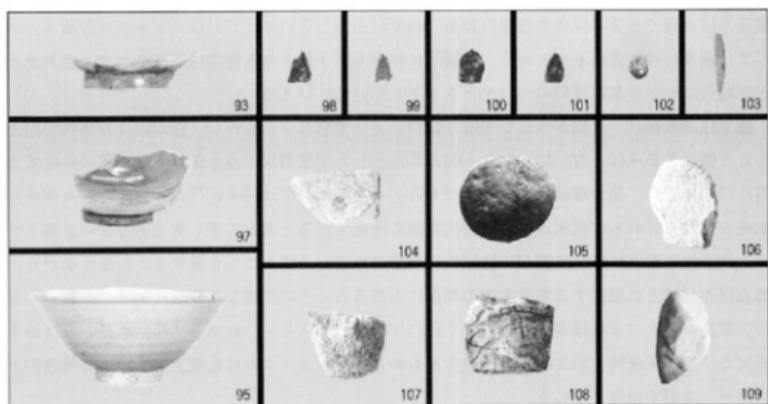
は側縁部のみ残る。105は敲打石である。径6.0~6.5cm、重さ360gを測る。106~109は石斧である。107は磨製石斧の刃部で、側縁部と基部を欠く。106・109は未製品であろう。

（参考文献）

- 浜田信也編「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集」 1970 福岡県教育委員会
- 下条信行編「宮の前遺跡A~D地点」 1971 福岡県労働者住宅生活協同組合
- 編「宮の前遺跡F地点」 1971 福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集 福岡市教育委員会
- 山崎純男編「下山門遺跡」 1973 福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集 福岡市教育委員会
- 柳田純孝編「福岡市野方中原遺跡調査概報」 1974 福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集 福岡市教育委員会
- 栗原和彦編「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集」 1976 福岡県教育委員会
- 山口讓治編「拾六町ツイジ遺跡」 1983 福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集 福岡市教育委員会
- 吉武 学編「拾六町コノリ遺跡第2次」 1987 福岡市埋蔵文化財調査報告書第162集 福岡市教育委員会



47. 包含層出土石器・土製品実測図 (1/2・1/3)



48. 包含層出土遺物 (1/4)

3. 小結

今回調査した第9次調査区は、1973(昭和48)年に福岡県文化課が発掘調査した第8次調査区の南に位置し、狭隘な谷を囲むようにして展開する湯納遺跡の東南部、つまり谷開口部の南側緩斜面上に立地する。調査区は幅13~18m、長さ50mの狭長な範囲であり、かつ台地の落ちぎわに立地するという条件下にある。そのため調査で得られる情報はきわめて限られた断片的なものであり、遺跡の全体像および性格等を十分に把握することはできなかった。しかし、幸いにも第1~8次調査が狭隘な谷を、丘陵から谷部へむかって東西に継続する形で調査されており、その成果をふまえながら本調査区の問題点について整理し、今後に備えたいと思う。

第9次調査で検出した遺構は、土壙20基、掘立柱建物跡7棟、溝3条のほかピットがある。時期的には縄文時代晚期末から古代に比定しえるが、弥生時代と古代のものが主体をしめる。

検出した土壙のうち、大形のSK-17・18は底面上からドングリが検出された。いわゆる、「ドングリ貯蔵穴」である。一般に「ドングリ貯蔵穴」は東日本は縄文中期に、西日本は晩期に集中する傾向があり、内容物も東日本ではクリ・クルミを、西日本ではドングリを中心とした傾向にあるといわれている。本調査区の貯蔵穴は、形態的には深さが口径の半分ほどの比較的浅い「皿状」のものに属する。また、その貯蔵法は、いわゆる「塊状貯蔵法」(註1)か、あるいは「交互貯蔵法」(註2)かは現状では判断できない。本調査区のドングリ貯蔵穴は、SK-17から黒曜石の打製石器と管状土錘を検出した外は夜白式土器と弥生式土器小片が少量出土したにすぎず、明確な時期は決しがたいが晩期以降であろうことは言えよう。これに対し、本調査区西方の第4次調査区で検出された2基のドングリピットは、縄文時代前期轟式期に伴うものであるとされている。しかし、立地的には台地から谷への落ちぎわにあたる地点、つまり地下水位が近く水分の保持や透水の容易な場所に占地している。これは「ドングリ貯蔵穴」としては通有の在り方を示しており、丘陵上に擴がると予想される竪穴住居跡群を考え合わせると同時代における集落展開の一パターンを示しているといえる。

掘立柱建物跡は、遺物が少なく明確な時期決定はできない。しかし、柱穴内より遺物が出土した2棟(SB-02・07)は、SB-02から出土した須恵器片1点を除いては少量の弥生式土器片にすぎない。包含層検出の遺物中でもっとも新しいものは10世紀代の綠釉片と龍泉窯系青磁碗があり、これらの状況からして古代末頃の所産であると考えて差し支えあるまい。第1~8次調査区の掘立柱建物跡群が10世紀代に比定されていることにも合致する。しかしながら、調査区が丘陵上に展開する集落本体の端部にあたるためその詳細な在り様は明確にし難い。なお、試掘データによれば本調査区のすぐ西には細い谷があり、いわゆる「湯納遺跡」とは谷を隔てた「畠ヶ尾遺跡」の北端部に位置するものと思われる。これは丘陵上に展開する集落のバターンを示す指標となろう。

(註1) 斎越正行「小笠穴考(2)」 1976 史館6

(註2) 註1に同じ

S K-18出土のドングリについて

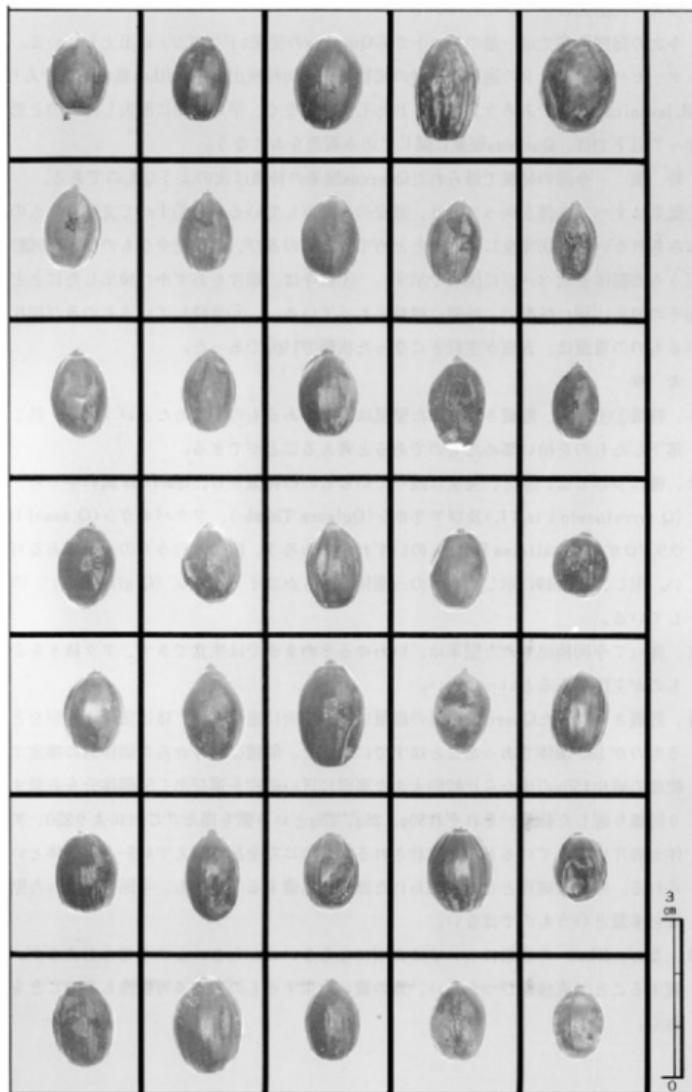
今次の発掘調査では一基のピットからQuercusの堅果(ドングリ)が出土している。またウォーターセパレーションの過程で小型の植物種子を39粒検出した。Rhus属の石果であり、ヌルデ(*R. javanica*L.)であろう。貯蔵されたものではなく、早い時期に混入したものと思われる。従って以下では、*Quercus*堅果に関してのみ報告をおこなう。

特徴 今回の発掘で得られた*Quercus*堅果の特徴は次のようなものである。

- ①堅果はすべて内部を失っており、殻皮のみ遺存している。 ②すべて完熟したもので、幼果はみられない。 ③完全に外形をとどめているもの及び、ほぼ完全なものは、185個体ある。(うち35個体を次ページに図版で示す) ④殻斗は、細片をわずかに検出したにとどまった。 ⑤その殻斗は浅い橢型で、外側に横輪をもっている。 ⑥半碎しているもの及び細片となっているものの重量は、表面が生乾きになった状態で150gであった。

考察

1. 特徴②④から、貯蔵されていた堅果は樹上にあるものを集めたというより、熟して地面に落下したものを拾い集めたものであると考えることができる。
2. 種については、⑤と、完全に残っているものの特徴から、*Quercus*属の中でも、シラカシ(*Q. myrsinaefolia*B.L.)及びアラカシ(*Q. glauca*Thunb.)、ツクバネガシ(*Q. sessilifolia*B.L.)ウラジロガシ(*Q. salicina*B.L.)のいずれかであろう。前二者のうちの一方である可能性が高い。但し、写真49に示したうちの一全体は明らかにイチイガシ(*Q. gilva*B.L.)の特徴を示している。
3. 従って今回検出された堅果は、いわゆるそのままでは生食できず、アク抜きを必要とするものが主体であるといってよい。
4. 貯蔵されていた*Quercus*堅果の総量について次に述べたい。ほぼ完全な外形をとどめているものが185個体であったことはすでに述べた。問題は破片からの個体数の推定である。半乾燥の破片150gの中から比較的大きな原形に近い破片を選び出し50個体分を計量することを3回繰り返した結果、それぞれ30g、25g、25gという値を得た。これにより250、300、300個体が破片になっているものと推計される。これに完全品を加えて435~485個体という値が得られる。微小な破片となって失われた部分を考慮するにしても、今回発見された堅果はそれほど多量というものではない。
5. なお、*Rhus*の石果については食用にならないこともないという考え方もあるが、それと貯蔵することは直接結びつかない。鳥の糞に由来するものである可能性も高いことを付記しておく。



49. SK-18出土 ドングリ